

私小説としての私の学生相談

甲南大学学生相談室 青木健次

I. はじめに

このような回顧録は自慢話か、自己正当化になるのがおちなので全く気がすまない。しかし、嫌なことでも可能な限りの努力はするのが「職業人」なのだから、書くことにした。嘘は書かないが、あくまで私個人の見方に基づくものなので、意図的無意図的な勘違いもあるだろう。そこで「私小説としての」とした。どっちにしろある個人が客観的そのものとして世間（この場合20世紀後半から21世紀前半の大学、より狭くは学生相談の世界）を体験することも記述することも不可能だ。同時に複数存在する経験の流れを、もし可能として、言語化したら、なにがなにやらわからない言葉の洪水にしかないだろう。

ポイントは「おわりに」でまとめることとしてKY大学への1968年の入学から編年体で記述していく。現在のKO大学の特任教授は2020年3月に終了することになるので、そのあたりまでを範囲としたい。

II. きのかさんこんにちは

1950年生まれだが早生まれだったので団塊の世代である。小学校から高校まで1クラス50人。家は田舎の農家である。次男坊。みかんを中心として果物をつくっていたので、自給用の野菜畑はあったが、穀類等は購入していた（と思う）。つまり、自給自足的に閉ざして生活がなり立つのではなく、物流の中にあった。1960年代に日本の工業製品の輸出のために国内林業は一気に輸入材におされていくのだが、アメリカに自動車を輸出するために西海岸のオレンジ類が輸入されることになって生家の生活は苦しくなり、みかん以外の果

物に手を広げることとなった。当時「猫の目農政」と方針の定まらなさが批判されたが、（今も）世の中が新たな極面を迎える時、明瞭な方針があるはずがない。

1960年代は世界平和が声高に語られる時代だった。国連が人類に何が必要かのテーマで世界中の若者の主張を求め、在学した高校でもクラスで討論があった。政治、経済、人権等の話題も出たが、秘かに「やはりメシが腹一杯食えるのが一番」と思っていた。子ども時代個人的に飢えを経験したわけではないが、世界の人口の半分は飢えているという時代だった。

KY大は農学部へ入った。食の増産にかかわる仕事をしたかったのである。さっそく世界の食料事情の本や熱帯での農業の可能性などの本を次々と読んだ。ショックであった。もし全人類に公平に分ける方法があれば食は不足していない。熱帯の強烈な太陽は有機物をすばやく分解し、大量の化学肥料を必要とし、強烈な病虫害には強力な農薬しかない。さらに「緑の革命」として穀物の生産はどんどん増えていたが、環境への負荷は大きく、なによりさらに人口が増大し争いは減らない。出口なし。

アメリカはベトナムで泥沼の戦争を続け、世界中の、日本も、大学で学生運動がさかんになっていく。威勢のいい政治的スローガンはどうもなじめない。目標喪失、方向が見えない。でも死ぬ気はなかったので、自分のメシ位自分でかせぐことにした。休学も中退もしなかった。学生という身分はバイト探しに便利だったし、バイトの支援システムもあった。授業料はただのような時代だったのでバイトだけで暮らせるようになった。ただ

し学業との両立という方向性を失っていたのでなるべくいろんなバイトをすることにした。短期なものもよかった。エピソードを2つ。1970年代のはじめと記憶しているが、東京のデパートでやる信州蕎麦展のための蕎麦を京都の疎水沿いの小さな粉屋で輸入物の品でひいて、たっぷり小麦粉も入れて送った。田舎では隙間作物として栽培し100%のそばがきを別にありがたがりもせず食べていたので信じ難かった。立喰そば用など殻を細かくひいて、ほぼ小麦粉100%であった。半年程そばを食べる気になれなかったが、値段は同じだし、食感がちがうし、腸の掃除にもなると食べるようになった。食堂のコップも店員たちは自分が水を呑む時は洗いなおしていた。バイト生にはたまり水でサッとすすいでどんと仕事をすすめるべく言っていたが、これも半年位でそうそう食中毒事件はないからいいかと気にならなくなっていった。世の中はそこそこで動いているのだ。

身長はあって動作がにぶかったのでよく叱られたが、「金をもらって社会性を身につける」という発想を得て、あやまり方がまず上達し、ついで「要領」もわかっていった。素人の学生が一寸した説明で働けるようなことはそんなに複雑なわけがない。身のこなしもよくなっていった。そこで次は「金をもらって体を鍛える」に切り換えた。田舎育ちである程度の畑仕事はできたので、庭細工、土木現場と肉体労働をした。右手の握力が60kgになった頃左を意識的に鍛えこちらも60kgとした。そんな中で、同じ汗を流した人から、「せっかくそんな大学に入る能力があるんなら世のため人のために使え」と諭された。バイトは生活費程度に減らし、同時代の本を読んだ。大学へも以前より行くようになったがやはり座学は身が入らない。農学部の演習は遠足のような面もあって、それにはフラリと参加した。そこで「きのこ」に出会った。

当時日本一、したがって世界一の松茸の先生がいたのだ。当然、周りに若い研究者やその卵もい

た。不思議な先生だった。戦争中にアルコール標本を全て蒸留して吞んでしまい、ホルマリンに入れ替えたというエピソード（本当かは不明）をお持ちだった。きのこの研究もだんだん研究室と試験管中心になりつつあったが、山歩きを大事にする人だった。きのこ探しはどこか探しのようなワクワク感がある。一流の人達の判定つきなので、実習のあとは鍋と酒であった。こちらはバイトで世間の雑用の能力は身につけていたが、一寸やそとでは職にも金にもつながらない地道な研究をしている人達があった。大自然それも下支えの分解者あるいは石楠花の葉上や竹の切株のような極小の生態系。実際はものすごい数の微生物がいてかつ雨が降らねば干上がるわけできわめて不安定。でも水が減ってくれば孢子等でそこから移動する工夫もする。もともと外からやってきたのだし。そういえば、田舎では松茸山の禁止の権利は11月3日で消えた。雨の少ない年には祖母は数人誘い合わせて出かけ、乾き気味の松茸をしっかりとってきていた。人も移ろい松茸山も変ってしまったけれど。

その研究室は、一寸浮世離れしたところもあって、好きだったのだが、もう少し「世のため人のため」の仕事を直接しようという意識が育っていった。当時の親友が教育学部の臨床心理学の授業を受けにいかないと誘ってくれた。彼は後に高校の教師になり生徒との接触に生かしていったのだろう。私は人の心の奥深さの方にひかれた。ポツンと地上にきれいにはえているきのこではなく、地中の大騒動にひかれるように。しかし方針は定まりきらぬまま留年すべく単位を少し残していたころ、ある先輩が「いっそ教育学部へ編入したらどうだ」とアドバイスをくれた。しばらく迷っていたが私の中で「それしかない」と結論が出た。そうなるとう行動力は身につけていたので、制度を調べ、1ヶ月もしない間に交渉しまくって単位を揃えた。甘い方も厳しい方もいた。「いつでも戻ってこいよ」とこちらのゆとりのなさを指

摘してくれたのは松茸の先生だ。さいわい単孢子培養による種の確認というきわめて細かな研究を仕上げたので、それを卒論とし、編入も面接のみで教育学部の3回生となった。この時の面接教授がなんとこの好きで、後に天然の食芽がとんだ時お持ちしたりした。しっかりお酒と変換して下さったのだが。

Ⅲ. 木の絵で人の心がわかるって？

座学も実習もしっかり参加した。心理テストの実習の中で驚いたのはバウムテストだった。きのこの図鑑絵のまねごとをしただけではあったが、きのこの絵はそれぞれのきのこの特徴を描きだすわけで、作者が表に出てはならない。だが実習してみてわかった。人はそれぞれの樹木を描いているのではない。木のイメージ（便利なので使っておく）を描いている。仮りに「りんごの木」と言ってもりんごの木のイメージを描いている。例外が後にあった。長野県で教員の研修をした時に実に写実的なものがあった。聞けば家にりんご園があって手入れもしていると。イメージは物そのものと人そのものの間にあるのだ。さらに後にはりんごの木の仕立て方にさえその時々流行があることも知った。人がかかわっている全てのは、人との各層の交流の中にあるのだ。遠くコーカサスあたりの原産地を離れずは主にヨーロッパで人々の期待と好みによって品種改良され、明治以降日本でも本格的に栽培されるようになり、日本人好みの品種改良がされ、他の国産の果物や輸入果物、他の菓子をはじめとする食品との競合共存の中で、時代とともに変化していく。木の絵は人の絵であり、木は人なのだ。

もっとも心理テストとしての描画がどの程度あてになるものであり、どのような着眼点から読みとっていくべきか。卒業研究で再検査信頼性を検証した。人はたしかにそれぞれその人らしい木の描き方を持っている。経験者はそれを読み取ることができる。もっとも心は単純な固定したもので

はなく、周囲との関係の中で同一性を維持しつつも変化してく。TPOによる表現型もある。修士論文では木のイメージがどれ程可変的で操作可能であるかを追求した。ある程度は意図的に操作することはわかった。が、いくらでも変えうというわけではなく、限度がある。そして人によってこの操作可能性には差があり、人格の安定性や創造性との関係もありそうだった。人間の心というやつはまことに深く流動的でありつつ、いくらかの安定性も必要とするのだ。

精神的な健康状態・活動性との関連があることもわかった。ただ、1つのサインが一義的に何かを表すというものでもない。たかが1枚の描画でもいろいろなサインがある。描線や筆圧、大きさのような要素的なもの、実や葉、幹や枝、根や地面のような樹木の要素がどう表現されているか。そして当然のことながら生活史や状態像の聞き取り、観察に基くもの、他の心理テストなどのデータ……。その時点に限っても1人の人物像を把握していくのは大変なことなのだ。印象を敏感に受け止め言葉にしていく感受性や言語能力も不可欠だ。そして力動的深層的な心理学の理論などなど。理解のための枠組みを与えてくれるのが理論である。やはり最終的には困難に陥っている人への援助につながらねばならない。ばたばたしているうちに博士課程も終わってしまい教育学部臨床心理学の助手（当時）になることになった。

Ⅳ. 書類はかき方次第

師のすすめによって院生時代からすすめていた大人用の箱庭やミニチュアの整備があった。なんといってもごくありきたりの木や家、人のミニチュアがないのだ。人は兵士人形などを削り着色してなおして日常的なものにしていく。家は模型用の細い角材等から組み上げていくことにした。もちろん城や特別な建物はプラモデルがありそれを利用して、加工していく。しかし、普通の家のプラモデルなどはない。およそ実際の工事のよ

うに柱を建て、屋根を組んでいくのだが、すぐにはでき上がらない。その建設中の建物がクライアントに受けた。そう彼らはまさに「建設中」なのであった。完成した家や建設中の家、ガタのきた家などがセットにかわった。木は元々関心があり、バウムテストの経験もあったので、針金、アートフラワー用テープなどを使い、葉は香港フラワーのビニール製を用いて組み上げていった。箱庭のミニチュアなので置いたら安定していないといけない。そして幹は上へ行くと少しずつ細くなり、大小の枝や小枝を出し、全体として太陽の光を効率よく受けるようにまとめていく。花の咲いたもの、実のなったもの幻想的な色あいのものなどあれこれつくった。なんといっても時間がかかる。小さなものでも1時間程、大きければ4・5時間。その後メーカーが箱庭セットを出すようになったが、およそ木はチャチである。ただあの手間をかけるのを考えたらとんでもない値段になるのでやむを得ない。ただこのミニチュア作りで複雑なものにまとまりを与えるにはある種の総合原理の必要性を体得した。

当時(1980年ごろ)臨床心理学は発展期で古い建物の一部がもらえた。心理療法室への改装計画の実務を担当することになった。そもそもどういう使い方をするのか、改装には費用がかかるのだがこれが大枠で降りてくる。しかも何倍という具合に変わる。その都度、積算の根拠がある。防音材は高い程、効果があって薄い。壁も1度塗り2度塗り、仕上げは白にするか、クロス張りか。当時の教授河合先生は、「ああやってこちらの意欲をためしているんだ」と励ましてくれた。そこで改装入門や工事の単価表に加え、建築基準法も学んで、専門用語を入れることにした。きめ手の1つになったのは天井も高く広い空間だったので、内部に更に部屋をつくることにして、そのミニチュアを作って、施設部への交渉のお伴をしたことだった。心理療法には秘密の部屋めいた仕掛けがあるのが望ましいのだ。理論的な説明は、もち

ろん、教授がする。助手はさもうれしそうにミニチュアをいじりつつ具体的な説明をする。予算は通りだいたい予定通りのものができた。

一番大変だったのは院生による相談料金の公式化であった。全国ではじめてというのはハードルが高く、越し方がわからない。「教育や研究のためなら正規の予算でやるべきだ」、「地域サービスなら心理テスト用紙代など一部の消耗品代程度でよいだろう」と反対が来る。例によって理論的には教授が説明していく。しかし1回あたり500円から3,000円、さらに5,000円という金額を「積算」で出さねばならない。改装工事のように物品はない。理念としては専門家による相談はしかるべく有料なのだという点にある。人件費を切り張りして料金の根拠とした。何度もの書き直しの後に、美術館の入場料のモデルが降ってきた。たしかにあれも原価計算などないだろう。適度に美術的価値を「代入」していくしかない。

これらの経験から、法的根拠の大切さ、落としたころの交渉の粘り、書類上の整合性などどの1つが欠けてもだめなことはわかった。一般の講義や研修の他にこういう全く新しい体験をすることになった。特に慣れない書類づくりはいくらかノウハウを身につけたとはいえ、気苦労の多い仕事だった。

V. 相談の現場へ 聞くと見るでは大違い (その1)

学生相談の現場(学内相談機関)へ出たのは、ある意味では妙ななりゆきであった。それまではユング心理学の研究者になるべく、ドイツ語の勉強を絵本から始めて、それなりに積み重ねて準備をしていた。ドイツ語の語学研修にも夏休みを利用して3ヶ月ケルンへ行ったりもした。徒歩旅行もしてみた。しかし、助手生活1年をすぎようとしたころ、学内相談機関の若手の1員が3月末で転出した。人事の秘密主義を守っていて教育学部の方には連絡がないままであった。公募等で空白

期間を置くと相談業務に支障が出るということで（行ってみるとそんなでもなかった）、既に教育学部で助手であった私が、学内移動ということで、簡略な書類審査だけでその年の6月から、講師としてそこに着任し相談業務につくことになった。「学内移動だから給料は増えない」と聞かされていたが全くそうであった。10円上がった。先輩の教員相談員2人、受け付けの定員内事務1人の中に3人目の相談員として入った。

まず驚いたのは相談量の少なさだった。学生相談業界では有名で、日本の学生相談の草分け的存在であったのに、少し実績を調べてみると3人の相談員で合計年に700～800回の面接をしているだけだった。1950～60年代には経済相談なども多く、総量も多かったのだが、70年代に入って心理相談的な内容には対応できていなかった。理論としても実績としても心理療法やカウンセリングは定着していなかった。面倒見の良い人情相談的なものに、流行してきたカウンセリング理論の化粧を施しただけのものだった。ロジャース流の三原則にしても、何故無条件の尊重が必要なのか、どうすれば可能なのか、共感的理解のための深層心理学的背景もなく、自己一致の厳しさも存在しなかった。

50代を超えていた他の2人よりずっと若く30そこそこだった私は、気さくなお兄さんの要素と新進の心理屋さんの要素を混在させて対応することにした。幸い博士課程の1年から週に1回学内診療所の精神科で心理テストやカウンセリングを担当していたので、精神的不調に苦しむ学生に接する経験はある程度つんでいた。助手時代も継続相談は担当していたので、相談室への着任時で他の2人の相談員に見劣りしなかった。また、修士論文の研究のために神経症の治療施設や精神病院でデータ取りをさせていただいた経験もあった。他にも別の精神科医のお手伝いでてんかんの共同研究も心理テストバッテリーでしていた。おかげで当時盛んだった、薬物療法か心理療法かとの不

毛の対立的議論とは無縁だった。

両方、あるいは経済的支援等も含めいろいろある方がいいに決まっている。議論のための議論のような学界の場からは遠のいた。まずは学内の相談体制の整備と個人としての相談能力の向上だ。臨床心理士の国家資格化は、想定しうる作業量や関係する人々の顔ぶれをみて、悩みはしたが、関与しないことにした。

個人の秘密を大切にする必要はあるにしても、協力し合うべき学内診療所との交流は全くなく、学生生活に広く関与している学生部との協力もごく表面的なものだけだった。診療所では既に博士課程3年と助手時代1年の計4年の協働があり、勉強会にも入れていただいていたので、月1回担当学生についての情報の交換をすることにした。もちろん必要な時は即刻。すぐ軌道にのった。紹介しっぱなしされっぱなしということはなくなり、薬物を用いつつ学生生活を整えていくといった作業が可能になった。当時の私よりずっと年上の方々でもあった保護者の方々との面談も増えていった。各学部の教授からなる学生部委員会にも「現状を知る者」として加えてもらった。引継ぎを1泊する熱心さだった。

教育学部時代には料金の公式化に四苦八苦して取り組んでいたのに、「授業料、税金から出ているんだ」と無料の教育支援サービスとして位置づけていった。大学が、相談機関はその1部なわけだが、学生にあらゆる支援サービスを提供することはできない。行政サービスや医療機関のような社会的資源もある。そしてこの現実社会の中で、可能な範囲の社会的資源の活用で、生活していく能力を身につけていってもらわねばならない。学内診療所精神科と協力して大規模な卒業・中退後の予後調査をしたところ、精神病圏の人たちは、予測しうるように、生活が大変苦しかった。行政サービスの窓口利用等も教えていく必要が見えてきた。現在にいたっても、様々な事情からひきこもりとなってしまい家族が抱え込むしかない実情

があるから、これからの課題は大きい。

VI. 一人でも多くの人に少しでもまちな教育支援サービスを

来る者こばまず去る者は追いかけるという姿勢でやっていくとどんどん相談量がふえていった。まず1人に使う時間を60分、50分、40分と短くしていった。40分は必要な人が少なからずいたので、それより短くしてよい人には現状の確認位でよしとし、ゆっくりと話す人のために基本的に40分刻みで相談スケジュールを建てた。きっかけはステューデントアパシーの学生から「毎朝まずここへ挨拶によって勢いをつけたい」という頼みだった。出欠表を作った。何度かの留年や休学もあったが、最終年にはしっかり出席し、「もう充分ゆっくり休んだし今は元気だから」で就活し就職していった。時間をかけての面談は手段ではあっても目的ではない。また、細々とした記録書きに時間を費やすのも無駄が多いので、それも切り詰めた。方針が見えてくるまでは時間を使うが、方法が固まってきたら、時々その反省はするとして、あまり長時間かけないことにした。

方法の見直しが必要だった。その能力を高める必要もあった。40才ごろを中心にこれにとりくんだ。80年代は主に不登校を対象としての、一般教員の相談研修が盛んだった。時間の許す限りこれらをひき受け、バウムテストの専門家というのも実施しやすい心理テストとして研修依頼も多かった。中には30年40年と現時点まで継続しているものもある。だれも彼もがカウンセリングマインドなるものを持つわけではない。1人ひとりが教師として自分の持味をどう自覚のばしているか。マンガを使ってみたり、童話を使ってみたり、それこそリングの木の実写スライドもつかってみたりした。あたり前のことにやっと納得した。教育力は一朝一夕では育たない。野菜だって半年、リングの木は10年20年かかる。それでもいろんなきっかけやヒントはばらまいていきたい。

それは学生相談そのもののやり方も変えていった。傾聴・受容に中心をおくだけではなく、古今東西の教育話も加えていった。40代も後半になれば、若い学生たちからは親の世代だ。杞憂、歩き方を忘れた宗人（そうびと）、助長……。中国の歴史書はまさに教養小説でもあるのだ。特に気をつけたいのは、歴史小説で同一の主人公を別の作者が異なる視点から記述するのを読み取ることだ。リフレミングの宝庫であった。一方的な教訓話には反発を覚える学生たちも、「こうも言える、こう考えることもできる」という発想の柔軟さと許容性は通じていく。否定的な自動思考や悲観的な発想にしばられがちな人達には、一方で特定の権威をゆさぶりつつ、それなりの論理を教えていく。それを習慣化して身につけていく。自律訓練や呼吸法、身体的リラクゼーション、系統的脱感作なども、自ら実践してみても、取り入れていった。50分程も自分の欠点をだらだらと訴えることは、生長の力にはならないという少々せつかさも含む発想である。本当におだやかで冷静に熱心に、そして暖かな雰囲気がかもしだせれば、ただ聞くことこそが相談の王道かもしれない。しかし休みなく各様の訴えにこのような姿勢を保ち続けるのは難しかった。また学生の方でも「方法」がはっきりしている方針がもちやすいようでもあった。

大きなストーリーも、話題導入のタイミングに留意しつつ、つけ加えていった。

宇宙137億年、太陽系50億年、地球45億年、生命40億年。特に生命史は、今を生きる我々の根源につながるものなので、真核生命の発生、光合成生物の発生、酸素呼吸生命や多細胞生命体、脊椎動物そして哺乳類へ。3000万年前の原猿と真猿の分離以来、真猿（我々を含む）は顔の表情も集団のコミュニケーションに活用し、昼行性の動物となった。さらに人類へ。2足歩行や食物、集団構成の変化、道具や火の使用。ことば、記号、文字の使用。ホモサピエンス20万年史、約4万年前か

ら日本列島での生活の歴史。季節ごとの食物地図をしっかりと把握し狩猟採集生活をしていたようだ。年による自然の恵みの優劣、いろいろな工夫で危機をなんとか乗り切ってきた。食毒の判定は経験（人体実験）になるしかなかったのだから。喰わずに死ぬか、喰ったら助かるかもしれない。戦争などの極限の状況では現在でも生じてしまうのだが。

食物のしくみや体のしくみ、健康への高い関心が世の中にはあったが、偏りも多く（これだけで大丈夫の誤った主張）、若い学生達の生活は個人差が大きかった。それなりに正しい食事や運動をしないで、元気ややる気がでるわけがない。3原則、だいたい規則正しい生活、バランスのとれた食事、全心全身感覚を適度に活用すること。廃用性劣化。現代人の日常生活は、狩猟採集用にデザインされたホモサピの体のしくみとはほど遠い。いくらかでもそれを補っていく生活スタイルを整えていくこと。新しい知識も積極的に取り入れた。1990年代から遺伝学や人体の画像診断、腸内フローラの重要性などが主張されはじめた。古い「真実」が否定され新しくなっていくことこそが科学であり学問である。誤った「健康法」で体をこわしてはならない。大学は学問研究に重きを置くので、脳を重視しがちだが、体全体がきちんと機能して、脳へとエネルギー源やO₂さらに建築材（タンパク質など）を送りこまなければならないし、食物や酸素は外部から取り入れて適切に加工処理され、不用となったものは体外へ排出する必要がある。眠っている間も体は活発に夜間でないとできないことをしている。もちろん感覚器官からの直接の情報に加えて、人類の積み重ねてきた大量の知識、新たにつけ加えられていくまだ評価の確定しない知識、ずいぶん忙しいのだが、無茶をすればせつかくの精妙なシステムはこわれてしまう。育てつつ安定もはからねばならない。

動物や植物の発生や成長のしくみもよく使った。ちょうど2000年代に入って、日本鰻の産卵場

所がついにつきとめられた。何故はるかに離れた深海で産卵するのかは地球史がからむ。変態しつつ日本列島までやってくる。一方で乱獲によって値段はそれこそウナギノボリ、密輸や産地偽造などなど。鰻ひとつから生命のしくみ、研究方法の開発、予算の獲得、流通や経済のあり方までみえてくる。大学をその一部とする世の中は、人々の欲望と思惑が対立協力、競争共存している。その中でのみ我々は生きていくのだから、ほぼ納得できるライフスタイルを探し求めていかねばならない。そして世の中も個々の人間も変化していく、流動的安定、変化による対応。

動物の子育てや野菜の育て方もよく使った。野生動物といえども現代にあっては人間社会との折り合いを作っていかなければならない。ここ1000年でも人類はいかに多くの動植物を絶滅に追いやったか。ごく一部を品種改良の改変を加えつつ利用してきた。家畜、栽培植物、近年は魚介類も養殖が増えた。選抜育種、交配育種、ついに放射線や遺伝子組み換え技術へと。それは人類そのものへも、直接間接に向けられている。ただ既存の知識や技術は十分ではない。人体も動植物もわからないことだらけなのだ。トマトひとつにどれだけの歴史があるか。北部アンデスでの数千年の栽培化、コロンブス変換、ヨーロッパでの改良と人々の食生活への普及。今も活発に新品種が開発されている。タネからであれ苗を買ってきてであれ、十分に準備した畑地へ播いたり植えたりしてせつせと世話をする。支柱を立て、脇芽を摘み、草取りに虫取り。鳥獣の害対策などなど。やるべきことはたくさんあるが、肥料や水は様子をみて与えることはできる。しかし太陽や暴風・・・。全てをコントロールすることはできない。古い中国の言葉である「助長」を思う。苗の成長を助けようとして引張ってやったら枯れてしまったという教訓だ。成長には全条件に関係しつつ、その生活の正しい早さがある。

当人も周りの人間も早くよくなりたい、なって

欲しいと願う。だが生命の回復力生長力を助ける工夫（状態をよく観察して必要そうで可能なことを実施）はできるが限度もあるのだ。だが、「ゆっくり」とか「待ちましょう」という言い方はしたくなかった。わかりやすいたとえを使うことにした。「かたつむりの公案」とした。早く歩かせようとつついたら目玉をひっこめさらに殻にもぐってしまう。かたつむりの速度は、遅く見えようとも、彼なりの速度なのだ。それを大切にしない。適温とか湿度はあるだろうが。

1990年代からは大学自体が改革期に入っていた。社会経済体制の見直しと深く関係していても。国の財政改革が絡むので、組織の再編は経費の削減、教育支援において何より大切な人員削減につながる恐れもあった。現在も進行中であり関係者も少なからずいるので簡略に述べる。慣れない課題ではあったが「大学は大学自体を実験の対象にしなければならない。見すごしていた課題への取り組みなのだ」と胆に銘じた。教育学部の助手時代に新制度の立ち上げに取り組んだのが無駄ではなかったし、当時の師の「必ず伝わると信じて努力しろ」の教訓も大切だった。

セクシュアルハラスメント、アカデミックハラスメント、パワーハラスメント、内部告発制度の窓口を、人員増を与えられつつ引き受けていくことになった。当然大学内の関連の教員職員や学外の関連社会的資源との協力協働も必要となった。情報の共有が、上からは強く要請されたが、個人情報への配慮も不可欠である。それぞれの特有の役割を尊重しつつ重なり合いのある分業をしていく。対立や議論もあったが、日本は法治国家であり、大学は弁論の場だ。

この時もひよんなことが起きた。はじめにセクシュアルハラスメントの窓口引受けを当相談室に要請された時、当時学内兼任でトップをやっていた人が、「臨床心理学に基づく学生相談は内的な世界を扱うものなのでそういう外的事象には向かないから」と週1回7時間の人員増を

断っていたことを、後から、知った。学生相談では修学、習学に加えて進路選択、学生生活一般に取り組むしかない。実際それまでに各種のトラブルに巻き込まれた学生の面談もしていたので、「セクハラと学生相談」という小論を紀要に書いた。それが当時国内では大学の現場からの唯一の論文であったので、学内の教員職員からの問い合わせがあり、体制づくりの一員に加えてもらった。20年前とちがい今回はアイデアをだし議論を重ねていけば、文書化は事務の専門家がすすめてくれた（以前のものも最終的な文書作製は担当者がしていたはずだ）。その後紆余曲折はあったが、見直しつつ改善しつつの取り組みは不可避不可欠のことなので、社会状況の変化で新たな種類のトラブルも発生するので、変化しつつ進行している。

2000年代に入って「障害学生支援」についても課題となった。国や文科省の方針があり大学としても体制づくりが急務だった。「実質定員を減らさない」を原則として、学内組織の再編をくぐり抜けていった。教授になっていたので、新組織のトップにつくことにもなった。もっとも給与革命がはじまっていたので、給与のピークは50才ごろ、延長された65才の定年を迎えたころは8割程になっていた。ただし、「忙しくて金を使う暇もない」日々だったので、金銭的に生活に困ったことはない。健康に恵まれたこと、家族の協力の賜ではあるが。こうして、18才で入学し2つの学部を卒業し、35年間は学生相談学生支援の現場に居続けて、無事(?)にKY大学を卒業したのだった。儀式めいたことは嫌いな性分であり、やり残したことだらけでバトンを投げつけるように渡す状況だったので、同僚たちによる送別会は強く謝絶し、一方で影に陽に支えて下さった学生部系の職員さんたちの送別会には送られて。

VII. KO 大学へ、聞くと見るでは大違い（その2）

2年間フリーターをしていたのだが、もう少し

現実世界（フリーターも現実だが）で働くべきかと思っていたころ、KO大学の学生相談室で特任教授として働かないかというお誘いがあった。バタバタと書類を整え（協力していただいて）審査面談を受けて再就職することになった。まず驚いたのは採用面接に向かう日（10月ごろ）、近くの川に猪の家族が昼寝をしていたことだった。猪の出没は聞いてはいたが、大都市の真ん中である。その後は見なかったが、ネットでは防げなくてカラスが生ゴミを散らかしているのは生ゴミの日にはいつものことだった。はじめはカラス防ぎの網カゴにすればいいのと思ったが、猪だ。安くはない網カゴも猪には簡単にこわされてしまう。ネットしかないということだ。たとえカラスが引きずり出しゴミが散乱し後の掃除が大変であったとしても。

さて、4月に着任してみると相談室の当時の現状であるがとにかく埃や古いゴミが多かった。いつも使用している所はきれいであっても、物置として使っている場所にはいつのものとも知らぬ園芸療法や陶芸療法などの残り物が、いつかは使うだろうということだろうが、乱雑につき重ねられ埃をかぶっていた。目についたものとしてヒョロヒョロと伸びて部屋の天井にぶつかり曲がってしまった柱サポテンがあった。サンスベリアや柱サポテンが、イオン効果で空気を清浄にするともてはやされたころの遺物なのであろう。年々の節で数えると10年程は放置されているようであった。年長者の権威を使い他のスタッフを動かしたまま来談していた学生にも手伝ってもらって吹き抜けのガラス張りのロビーに移動させた。土も変えた。その年からグンと太く長く成長していった。園芸療法の畑も十分に世話されていなかったので用具を買い整えてもらい（年々の園芸療法のおかげだろう、研究費が使えた）たがやし直すことにした。よくわからない古い肥料や固まった陶土は深く埋め込んだ。雛壇のような畑は回りの生垣の根が入り込んでいたので、力の限り深くたがやし

木々の根や石、瓦礫を拾いだした。少し深く掘ると阪神・淡路大震災の時のビニールシートやレンガなどまで出てきた。学生相談室の建物は某企業の会長がKO大に寄贈し、校舎として使われていたものが大震災で倒壊し、その跡地に建設されたものということだった。建物部分は基礎もしっかり整地したのであろうが、畑はざっとならして表層に畑土をザッと入れただけのようなものであった。土中で腐っていきやがては腐葉土ともなりそうなものは皆埋めこんで、もう遅かったのだが大急ぎでじゃが芋を植え、整地をひとまずよしとした。これまで年々さつま芋や夏野菜を作ってきたということなので、土壌改良のための有機土をしっかりと入れて、それらの準備を終えた。芋として山芋や里芋も植え、さつま芋のつる苗は園芸療法の一部として、担当者と共に学生達と植えつけた。ナス、ピーマン、トマト類の苗を植え、新しいものも作りたかったので家庭菜園用に改良されたネットメロンも植えた。時々の草取り水やり、毎日の虫取り。無農薬というのはとにかく虫取りなのだ。人の目で見える範囲は、農家の次男であったことと自宅での30年以上の家庭菜園での経験が生きたし、体力もまだそれなりにあったので、せつせと世話をした。収穫物は学生たちとの料理会や他のスタッフへのプレゼントとした。この時に、野生の植物がいかに長い人類の努力や歴史に深く根差しているかを教えることにした。なぜ里芋とか山芋という単純な名前なのか（品種は多い）、じゃが芋やさつま芋はコロンブス変換以来の来歴が名前の中にある。日本ではさつま（鹿児島）から広がったのでこの名だが、唐（から）芋が琉球芋となって日本に伝わったのだ。どの作物も人類の、時には流血を伴いながらの、長い努力の財産なのである。

室内の観葉植物の世話もひどいものであった。土を替え古い葉を取り除く等の世話をし見違えるようになったのだが、こちらは毎月1回業者に世話を頼んでいるということなので、なんといつて

も再雇用の定年まで3年しかない、その後の持続可能性を考慮して手を引くこととした。室内でそれまで生き長らえてきたのだからこれらかも生きていこう。

重要なのは、学内と学生相談室との連携協力、学生相談室内の協働の醸成であった。表面的にいがみあっているわけではない。しかし「重りのある分業」になっていない。役割を生かした分業と支え合うチームワークになっていないのだ。そのころ KO 大学では障害学生支援体づくりと学内組織の改変もまったなしの課題であった。KY 大学とは大学の個性が違うし、私がむき出しで以前のやり方を提案しても外様である。嫌がられるだけだ。KY 大学で50代から意識的に演出しつつ板についてもいた「東洋の賢人」に飄逸味を加えて、「敵」をつくらぬ工夫をした。「議論に勝ったら敵ができるだけ」という人生訓も考慮した。着任式にはいずれも自作したアカザの杖（仙人の杖だ）と一升は入る瓢箪をつけ南天（難転）の栓をつけたものを持って出席した。たまたまその栓が抜け落ち拾われ届けられることで一気に学内に知られることとなった。なんとといっても3年しかないし、その後の継続発展につながらねばならない。組織図をつくるのはそんなに大変なことではないのだが人と人の協力関係を育てるのは、見えない雰囲気也不可欠でもあり、とても大切である。委員会等では1年目はかなり発言し、徐々に減らしていった。うまくいったかどうかはこれからの人達が評価してくれることになるだろう。まだ空の上から見守っているからという気はないのだが。

相談室内では手塩にかけた作物に蘊蓄を込めて説明をし料理方法にも口を出した。植物とはいえ、虫を自ら殺害しているのだし、生命のあるものだ。おいしく食べなくては申し訳ない。手間をかけた素材、正しい料理、すてきな会食者、そして心に憂いなし。満腹満足は多くの条件が満たされてはじめて可能なのである。不満や苦痛のタネ

などいくらでもある。それに現実的に立ち向かうには心身の栄養になる食事は根源的絶対的生理的に不可欠なのだ。これは生命40億年の波乱の歴史の中で変わらない。ついでながら、厳寒の前回の氷河期を生き延びたマンモスが1万年程前に絶滅していったのは、ホモサピが集団でこれらを狩って喰ったことに加え、温暖化で雪が増え冬の食料であった枯草を埋めてしまったのもその原因の1つといわれている。地球上にどっさり氷が積み重なると、空気中の水分が減って積雪が減り吹きとばされ、枯草は冬でも食料となっていたのである。今、食品ロスが問題となるほどに食料はある、やはり偏りはひどいが。食べるものがなければ生きていけないのは絶対的現実なのだから、グローバルな人、物、情報の交流の尊重と共に食べ物への配慮感謝を忘れてはならないだろう。少なくとも学生相談室の雰囲気をも温めなおすためには食べ物はずごく役に立ってくれた、と思う。食品食材料理に共に食べてくれた人達に感謝。

VIII. お世話になったたとえたち

まずクライアントの状態。働きすぎて疲れてしまった馬のようなものである。回りからは「何もしてないのに『疲れた』と言っている」と見られることがあるがこれは「何もできない程疲れている」と把えたい。そうするとムチ（無知）からムチ（鞭）を入れることは逆効果であり虐待だと判る。当人もやりがちなので注意がいる。十分に休養や栄養をとって着実に体力気力を取り戻していくのが正しい発想である。特に睡眠中の回復力の向上のためにほぼ同じ時間帯により質のよい睡眠をとれるように工夫し試行し実行していく。

吊り橋をのぞいて動けなくなってしまった状態。他人の態度、自分の伝えたいこと、将来のできごと死のこと……。確実なことなど何もなくて不安は人間につきものだ。自分というのも考えだせば哲学的命題だ、「私とは何か」。考えてもきりが無い、ここらでやめてもう寝ようが可能な日々

は無事に過ぎていく。吊り橋で動けなくなっている人に、「下をみるからだ」と怒ってもしようがないだろう。「前向きに生きろ」もそうだ。人生とは比岸から彼岸への吊り橋（白道）を渡るようなものなのだ、古来無数といえるほどの知恵がある。

カウンセラーは何をするのだろうか。クライアントの自省は玉葱の皮むきのようなものか、これでもない、これでもない……。どこまでいっても芯はなく、涙はでる。鬼皮ではなく十分柔らかな鱗茎になったら、それは皮ではなく実だと気づいてもらわねばならない。「これが真実だ」と主張する本も多いが、他の考え方もあり、真実の内実を考えていくこともできる。どうしても「これは皮ではなく実だ」という発想の転換がいる。

賽の河原の石積みのようなものかもしれない。積んでも積んでも、内側からも外側からも「鬼」がやってきて崩してしまう。地藏和讃の鬼は容赦がない。死んだ幼子に「乳が出ない、食べ物が無い」と親を苦しめなかったかと責め、死んだ児に泣く親に「お前たちの涙が賽の河原で冷雨となって子の服を濡らすのだ」と責めたてる。地藏「自然治癒力・生命力」の登場、鬼を追い払い子を救済していく。治療者は石の形（クライアントの状態や生活など）をよく見てなるべくしっかりと積んでいくのが仕事。保護者ではなく、救済者では絶対でない。

少し今風のたとえ、脳外科の手術。1990年代からは心的現象を遺伝や脳から説明する傾向がある。既述のように状態像は遺伝と環境の相互総合作用なのだが、脳も身体の諸器官との相互協力で動いているし、感覚器官には外的対象世界がいる。また時空を超えた間接情報も不可欠だ。「相談なんて話を聞くだけじゃないか」と批判する人たちに、少しゾワゾワしてもらうために、「暗闇で脳の手術をするようなもんです」と説明することがあるのだ。

古典的には釣り人か。一見静かにのんびり糸を垂れている。しかし浮きはしっかり見ておかねば

ならないし、その揺れから一瞬の判断で竿を挙げねばならない。水面下の魚に釣り人の緊張が伝わるかどうかはわからないが、面接している時は緊張は伝わってしまう、あくびだって移る。おだやかで冷静で熱心に、そして暖かく。

回復へのプロセスとしては、かたつむりの公案は既述したので、ダムの水位の回復。十分水位が上昇すれば流入分の水を落として発電ができる。一寸たまったらすぐ使ってしまうのはいつまでも十分な水位にならない。2つの狙いがある、1つは保護者がよく口にするのだが「休みの日は楽しそうにしているのに学校へ行くべき日は起きられない」という嘆き。あるいは「気分転換に」と行楽につれだしたりもする。だが楽しいことにも活動用のエネルギーは使ってしまうのだ。そして楽しいことをしている間は疲労計が、元々故障気味なのだが、麻痺していることもある。あとからどっと疲れが出るというやつだ。

もう1つは比喩の限界でもあるが、どうすれば流入量を増やせるかに係る。服薬してゴロゴロしていれば、好きなゲームでもしてガラガラしていれば回復するならそれでよい。学生相談では己を知り世の中を知り将来の方向性を求めていかねばならないし、部屋から家から外へと出ていかねばならないのだ。SNSやPCで表面的情報は入手可能だ。それこそ過去を含め世界中のものが。だがそれらを考慮し吟味し推論し決断していくには心身の経験や体験、直接の人間関係が不可欠なのだ。もちろん実生活でも「騙す」人はいる。しかし、SNSやPCの文字情報より肉声の電話の方が難しく、目や態度まで上手に人を騙せたらそれはもう大役者である。失敗は成功の素。少しずつ体力や実際の経験知を上げていくに限る。

IX. おわりに

KY大学やKO大学の相談機関についてずいぶん悪口を書いてしまった。しかし、KYでは若い理想からKOではそれまでの経験から、新参者

として不十分なものを見いだしいくらかでも「改善」を試みるべきだろう。相談機関も大学も、だぶん世界そのものも、「完成」ということはないのだから。形式の完成は形骸化の始まり。どう見ても「完成」にはほど遠いものだからこれからの人達もすべきことはいくらでもあるだろう。ただし改善そのものもまた持続可能を求めて点検していくしかやりようはないと思われる。

手の内をあかしてしまおう。これまで実人生の転機を救って下さった師の方々に少々ふれたが、実は星の如く仰ぎ見る師がいる。有名中の有名であり、千変万化で把え難い良寛である。星に近づくことはできないが地上をさ迷う時に方向を与えてくれる。良寛自身江戸時代の後半という社会変化の中で、父母を捨て家を去り、よき師に出会い、それでも寺院制度から立ち去った人物である。私が方針にまよっていた1990年代は、経済の頓挫もあったのだろう良寛ブームであった。次々と本が出た。多くは一方的で作者が自分を語りたがる代物だったが、地道な資料研究も土台となって、江戸時代の後半を「我が道を行く」ではなく、「我が道」を探し続けた人物である姿がみえてくる。私は時には彼が歩いたであろう場所をうろつき、時には身長が同じということさえ支えとした。

その良寛が円通寺の修行時代を共にした仙桂和尚を懐かしむ詩を後年書いている。経を読んだり議論をしたりするより寺の畑で野菜を作って修業僧たちの食事の足しにしていたという。私はより直接的には、KO 大学時代は特に、この人物をまねて（学び）いたともいえる。当然当時の作物と

今は違うし、有機肥料無農薬しかない。殺生禁断だから虫害鳥獣の害はどうしていたのだろう。何を作ったのだろう。夏物は茄子（なす）、胡瓜（きゅうり）、豆類、あかぎ、しろぎ、芋類は？暖かな瀬戸内海だからもうさつま芋は普及していただろう。良寛が焼き芋をほおぼる姿など想像すると心も暖くなるのだが。冬はやはり大根に蕪、人参、法蓮草、アブラナ科の菜っ葉類、牛蒡（ごぼう）を作る畑土の深さがあつたか。結球白菜はまだ成立していなかっただろうし、甘藍（キャベツ）も明治の洋食化からだろう。禅寺だから蕪（にら）、葱（ねぎ）、大蒜（にんにく）はご法度だ。コロンブス変換の中で一早く世界に広がった唐辛子はどうか？ 当時は新野菜だから文言的に禁じられてはいなかったかもしれないが、刺激物には含まれる。帰国僧が持ちかえって当時の新中国野菜が入っていたら楽しいのだがどうだろう。ただし野菜たちの歴史は古い茄子はインド原産胡瓜は文字のとおり。こんなことをあれやこれや想像しながら家庭菜園や KO 農園で野菜たちの世話をしていると、仙桂と一緒に畑仕事をしているような気もしてくる。

もっとも、私は有機無農薬栽培を「自然農法」と呼ぶのには大反対である。風水害や病虫害も自然なのだ。それらに抗して人が利用できるように、自利利他を理想としつつ、手間暇をかけるのだから、「手作り農法」と呼ぶべきだ。こんなことにまでこだわるのだから、私のこの先の日々も山あり谷ありであろう。でもそれでいいのだ、脳波だって平らになったら終わりなのだから。

ABSTRACT

My Student Counseling as an I-Novel

AOKI, Kenji

Konan University

This paper is a summary of my personal experience gathered in my student counseling activities in the last 40 years. Thinking and looking back, it is interesting to realize how various things are interconnected and deeply interwoven. The roles that are required in these activities and the applicable techniques are never the same. Someone who is in his/her 30's might not be able to play the same role and use the same technique as someone who is in his/her 50's. Although there are certain limitations, as counselors are meeting young students, gathering plenty of stories and updating one's knowledge about the presence and future is essential.

Key Words : student counseling, horticultural therapy, relationship between homo sapience and food/eating.
